現代俳句用語辞典

目黒書店

現代

俳句用語辭典

目黒書店

現代俳句用語辭典

昭和26年6月1日第1刷　印行
昭和26年6月5日第1刷　發行

定價 180圓

編纂者　俳句研究編輯部

發行者　目黑謹一郎
東京都千代田區神田駿河台三ノ一

印刷所　白橋印刷所
東京都中央區西八丁堀四丁目四

發行所　目黑書店
東京都千代田區神田駿河台三ノ一
振替東京二八〇九

凡例

○語彙の排列は五十音順に依り、語彙の表現は表音的假名遣を用ひた。

○從つて「ゑ」は**え**、「を」は**お**、「くわ」は**か**であらはし又「い」に發音する「ひ」は**い**、「え」に發音する「へ」は**え**、「お」に發音する「ほ」は**お**、「わ」に發音する「は」は**わ**であらはした。

○それぞれの語彙の下に各該當する漢字を示し、共場合送假名は歴史的假名遣を用ひた。

○ここに採りあげた語彙には季語は加へず、季語の解釋、例句はこれを歳時記にゆづるが參考までに簡單な**季寄せ**を附した。

○例句の作品は、戰後刊行された句集、全國の俳誌から拔萃した。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

索引

あ……七
い……一二
う……一七
え……二二
お……二三
か……二七
き……三五
く……三八
け……四一
こ……四三
さ……四八
し……五三
す……六〇
せ……六三
そ……六四
た……六六
ち……七一
つ……七二
て……七五
と……七七
な……八〇
に……八四
ぬ……八六
ね……八六
の……八七
は……八八
ひ……九三
ふ……九七
へ……九九
ほ……一〇〇
ま……一〇三
み……一〇七
む……一一〇
め……一一一
も……一一三
や……一一五
ゆ……一一八
よ……一二〇
ら……一二二
り……一二三
る……一二四
れ……一二五
ろ……一二五
わ……一二五
ん……一二七
季寄せ……一二九
附録……一四一
跋……一四八

現代

俳句用語辭典

あ

あ（吾）われ、私。

病よりふかき憂ひは夏日と吾に　中村草田男
落ちぎわの冬日の榮の吾も一人　大野　林火
吾をさとす母と蠶豆むきにけり　黒杉　芙沙

ああ（嗚呼・嗟・噫）ものに感じて喜び悲しみを表はす聲。

ああ五月材を斷つ音を川べりに　山口　誓子
寒雀神の域にてあゝ擊たれ　佐野まもる

あい（間）あひだ、ま。

おくつきや卒塔場のあひの曼珠沙華　吉田　冬葉
浪のあひ一鱗しろきちぬを獲き　山地　亘郷

あいびき（逢引・媾引）男女の密會。

あひびきが寢てゐて見える冬日和　日野　草城

あうら（蹠）足のうら。

夏の湖蹠に感じ睡りたり　島田　洋一

あうん（阿吽・阿吽）初と終と、呼と吸と。

黴の宿呵吽の朝日はすかひに　加藤かけい
餅つきの阿吽やをんならの中に　佐竹比露史

あえか　かよわい、弱々しい。

種薯のこのあえかなる芽を信じ　山口　青邨
炭火あえか告ぐべき刻をはかりをり　山口　等

あおど（跫音）足音。

秋汐に貝をつぶせし跫音乘る　原　衣紗美

あおみどろ（青絲・水綿）接合藻類の淡水藻の一、綠色で螺旋狀をなし水田や池沼に生じる。

青みどろ田につく頃の祭かな　山口　誓子
涸川に水きて育つ青みどろ　尾原　葉滴

あがく（足掻く）手足を動かして焦立つ、氣をもむ、わるさをする。

蟻あがくこと懸命に水と暮る　長縄　英山

あかし（明し）あかるい。

南風明かしひりひりと山椒喰　臼田　亞浪

あかし（證）證明、證據。

證して醫師あら貴と疫厠ならず　石塚　友二

あかつき（曉）あけがた。

寢くたれて春あかつきの旅愁かな　村山　古郷
凍星やあかつきちかき工場區　木檜　白鴻

あかとき（曉）よあけ、あけがた（古語）。

あかときのひぐらしを遠く遠くきく　阿部　筲人
あかときの灯を入れてきく野分かな　下田　素秋

あかね（茜）あかね色、暗赤色の略。茜は茜草科の多年

牛蔓草、秋、黄白色の花を葉腋に着ける、根は赤色染料とする。　細谷　源二

十勝野のあるうま小屋の夕茜　坂東　菖雨

ガンヂーの死を遠天の寒茜

あがのう（購ふ）買ふ。

海風の驛やあがなふ巴旦杏　吉田　忠一

年四十福壽草など購ひて　相馬　黄枝

あからさま（明白）ありのままに、あらはに。

花胡瓜に陋屋の裏あからさま　小澤芝蓉子

あぎと（腭・腮・顎）あご、あとがひ、魚のえら。

數の子を嚙めるあぎとを子は仰ぐ　二宮多々志

あくがる（憧る）あこがれる（古語）

人戀へばあくがれの雪降りいだす　鶴　淡路

あくがるゝこの世の幸や盆の月　加藤　覺範

あくた（芥）ごみ、ちり、くづ。

春の水あくた突き立て海へ入る　渡邊　白泉

あぐむ（倦む）うみつかれる、もてあます。

秋の夜の妻なく煙草吸ひあぐね　中西　一生

あけ（明・曉）よあけ。

貨車は曉の投炭小鳥沖に湧く　中島　斌雄

あけ（朱・緋）赤い色。

蜿牛虹は朱ヶのみのこしけり　大野　林火

日かげりて朱のしづまる唐辛子　塚原　麥生

鷄の朱けが都會の幻像をのせて行つた　吉岡禪寺洞

あけくれ（明暮）朝晩、日常。

あけくれの一間の住居春を待つ　木下　春

あけぼの（曙）夜のあけ始める頃。

みどりなる春あけぼのの平泉　鈴木　芳如

冬曙六人の病者うかびそむ　石田　波郷

市中や鷄あけぼののなづな打ち　篠原　巴石

あさかげ（朝影）朝日影。

粥煮立ちぬくき朝光芽木より來る　白河　月光

あさげ（朝餉）朝めし。

春深く朝餉の夫婦ふたりぎり　猪間　八蹄

あざける（嘲る）そしり笑ふ。

雪の鴉の眞赤な舌にあざけられ　富澤赤黄男

あざむく（欺く）だます、あざける。

北風いそぐやひとをあざむき了せたり　大野　林火

あこ（吾子）自分の子を親しんで言ふ語。

心さまざまに冬木提ふか默する吾子ら　細谷　源二

あさよ（淺夜）夜の未だ更けぬ頃。

白樣の花ひきしまる淺夜かな　有馬草々子

淺き夜の芙蓉の雨の音とならず　有阪句鈎人

あしたゆうべ（朝夕）朝に夕に、常に。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

歳末やあしたゆうべの水の色　池　芹泉
かげろふにあした夕べの日のゆがみ　佐々木有風

あしらう　挨拶する、配合する。
落葉蹈みあしらへる逢瀬かな　道山　壯伸

あじろ（網代）冬期、川の瀬に竹や木を編んだものを立てて魚を捕るに用ふるもの。
寒の水いく網代來し音をたてぬ　竹内火露子

あす（明日）あした、未來。
足袋ぬいでそろへて明日をたのみとす　細見　綾子
稲妻のほしいままなり明日あるなり　石田　波郷
明日を信ず鐵骨に降る雪の向き　榎本冬一郎

あせる（褪せる）色が薄くなる、色がさめる。
足袋のビロード褪せしをぬぎ捨てゝ眠る　大年　昭子
褪せてなほ褪せてゆく藤、妻のやうに　幡谷　東吾

あそぶ（遊ぶ）仕事をせずにゐる、物見遊山をする、ぶらつく、他郷に學ぶ、なぐさみたのしむ。
日覆の葭簀に遊ぶ秋の蝶　高濱　虚子

あだ（阿娜、婀娜）なまめかしいさま。
退院の阿娜な女の秋袷　魚井　苔石
たけくづす五體婀娜なる籐寢椅子　有馬草々子

あたたか（暖・温）暑くも寒くもない温度、金錢の豐かなこと、愛情のふかいこと。
マッチややにあたたかき色となるを持つ　篠原　梵
枯つつじ雨の降る日はあたたかく　佐野青陽人
血を喀けば寒林むしろあたたかき　榎島　沙丘

あとさき（後先）前後。
夕刊を買ふあとさきの時雨かな　中島　刻非
あとさきの月に秋めくわたしもり　廣井鴉峰女

あなうら（蹠）足のうら。
足袋ぬいであなうら痒き花疲れ　鈴木貞砂女

あなた（彼方）あちら。
寒林のあなた狂院に母います　三谷　昭
落葉ふるあなたは焦土また焦土　志摩芳次郎

あなどる（侮る）みさげる。
朝寒の寡婦を侮り放ち軍鷄　長谷川朝風

あばら（肋）あばら骨（肋骨）の略。
ふて寢覺めあばらしづかに祭笛　山田　親一
闘病の肋しづかにきりぎりす　大北たきを

あふる（溢る）こぼれる、みちあまる。
稲の花井手みなあふれそめにけり　木下　夕爾
窓の雪女體にて湯をあふれしむ　桂　信子

あま（海女）海中に入つて、あはびなどを採る女。
朝燒の雲に立ちたる海女裸身　川邊　潔
背負籠並べて海女ら火をたける　江澤　政行

あまさかる（天離る）「鄙」の枕詞。
天さかる鄙に住みけり星祭　相馬　遷子

あまず（剰す）のこす。
剰し挿すコップの小菊身に親し　篠田悌二郎

あまた（數多く）多く、たくさん。
悪農のあまた並べしかゝしかな　亜須　奈郎
稲城よりあまた震へる漁燈見ゆ　西村　公鳳
冬の灣入江と宇をあまた持つ　篠原　梵
後妻にあまた産ませて寐寢せり　山口　誓子
霜柱あまた倒して牛寛りぬ　三枝　生志

あまねし（普・遍・周・洽し）ひろくゆきわたる。
枯菊を抜いて晩冬の日あまねし　内藤　吐夫
種蒔ける者の足あと洽しや　中村草田男
春雨にあまねくぬるるさるすべり　高橋　木槿
水ながる野の寒月のあまねくて　鈴木　楊一

あめつち（天地）天と地、てんち。
天地に妻が薪割る春の暮　石田　波郷
あめつちの旱の中の胸一つ　橋本　鶏二
あたゝかき日はあめつちに返り花　鈴木　朱竹

あめのあし（雨の脚）あまあし。
花合歡に嶺吹の越しの雨の脚　渡邊　秀人

あめのした（天の下）あめがした。
天の下毛摩は風に乾きをり　前田　普羅

あもる（天降る）ふる。
天降る雪地に近づきてさみしさよ　野添　秋夫

あやし（怪し）いぶかしい、不思議、不氣味。
妖しく太く寒の金星犬吠えて　原子　公平

あやまつ（過つ）しそこなふ。
茄子漬や煮花あやまつ膝のさき　石橋　秀野
あやまちて女十薬の花を嗅げり　野嶋　島人
舟遊びあやまちぬらす袂かな　高橋淡路女

あやに（奇に）不思議に、たとへようもなく（古語）。
寒きびしひとの青春眼もあやに　日野　草城

あやむ（危・殺む）ころす、危害を加へる。
玉蟲が寢間着の妻に殺めらる　齋藤　玄

あやめ（文目）色どり、模様、差別、すぢみち。
春雷やあやめもわかず草にほふ　間立　素秋

あらがう（抗ふ）さからふ。
鴨撃ちにあらがふごとく葦ゑてり　竹下しづの女
旱天や杉にあらがふ五位二つ　前山　亘峰
蘆の芽や女體あらがふかぎりなし　木田　董

あらず（非ず・在らず）そこに居ない、さうではない。
凍る夜の獨房寢向く眉あらず　秋元不死男
秋航や群れゐし燕今日あらず　阿部　栖一

あらぬ（非ぬ）さうではない、別の、意外な。

行年の想ひもあらぬ病臥かな　龜井　閑歩

あらぶ（荒ぶ）あばれる、荒れてゐる、破れてゐるくなる、うとうとしくなる。

雀蛾あらび夕顔を暗くする　市川　丁子

夕燒の色あらびそむ白魚かな　北原　葉一

あらわ（現・顯・陽・露）むきだし、おもてむき。

家のうちのあはれあらはに盆燈籠　富安　風生

尼の耳あらはなるかな秋風に　佐野青陽人

あらはなる肋骨冬日ゆらめき落つ　桑原　月穗

せいかつのよごれあらわに麥みのる　北垣　一柿

ありあけ（有明）月が空に殘つたまま夜があけること。

有明の饑じき子抱く蚊帳の中　石田　波郷

有明の月をまともや籐寢椅子　大場白水郎

ありく（歩く）あるくこと（古語）。

口笛の谺にありく冬の山　前田　普羅

ありしひ（在りし日）以前の日、生前。

雨の節句ありし日のひな瞼にす　千賀　一鴿

ありそ（荒磯）あらいそ（古語）。

七星の低き荒磯や土用波　藤枝　青苔

ありどころ（在り處）在る位置。

水餅や母の世よりのありどころ　今井つる女

ある（生る・現る）うまれる、あらはれる。

秋風のあなた葬列現れて消ゆ　花谷　幸一

世に生れて百日の眼や鰯雲　大島四月草

あるいは（或は）または、ひよつとすると。

あるひは思ふ天の川底砂照ると　齋藤　空華

あるじ（主）一家の主人。

ひぐらし前に鳴き後に鳴きあるじひとり　荻原井泉水

あわい（間）あひだ。

畫寺の風のあはひのちんちろりん　中川　宋淵

あわし（淡し）うすい。

秋風や渚に淡き己が影　宿谷　和巳

あわれ（哀）かなしいこと、ふびん、趣が深い、あつぱれ、ああ。

白樺の花をあはれと見しがわする　水原秋櫻子

白つゝじあはれ人妻なりしかな　中川ふみ子

霜燒や坂東流の名のあはれ　吉江　洌

針でほる棘あはれに光る雪ふる日　加藤　楸邨

啞蟬のあわれや少しつゝ攀る　長内不來方

あんしゅ（庵主）庵室の主人。

磊落の庵主なりけり根深汁（茨城圖亭居）　村山　古郷

あんきょ（暗渠）地下に設けた水路。

寒月下暗渠を水の出るところ　山口　誓子

流れ藻のゆくて暗渠のほかになし　堀　葦男

い

い（井）井戸。
井を晒すおしろいの花にかゝはりぬ　尾崎　迷堂

い（威）人をおそれさせる勢ひ、おどすこと。
徽天婦與錦の威に狎れて住む　池上浩山人
落ち下る威を失はず滝凍る　佐々木六朗

い（意）こころ、おもひ、意味、趣、意志。
白晝も捕鼠機は捕鼠の意を絶たず　目野　草城
安定なき風にてのぼる意のさかん　橋本多佳子

いえ（家）自宅、家族、家名、流儀、家元、門地。
いわし雲家出てすぐに家を繕ふ　橋本多佳子
實櫻に琴渟みをれど戰後の家　土岐錬太郎
醉ひし父を家にのこして花火觀る　川端長太郎

いえずと（家苞・家裏）家への土産。
花櫨子憶良が子等の家苞に　高橋　釆和

いお（庵・菴・廬）隱者、僧などのゐる家。
約束のごと椿咲き庵の春　富安　風生
草餅やさやけく明けて庵の四圍　有川　露光

いかつい（嚴つい）いかめしい。
男三十いかつき手つき秋刀魚やく　花谷　幸一

いかに（如何に）どんなに。
生きがたしいかに世の虹飾るとも　鈴木　清

いきずく（息衝く）ためいきをつく。
葡萄の粒息づくごとく曇りゐし　中島　刻非

いきどおる（憤る）腹を立てる、なげく、ふるひたつ。
温石に足焼きて何いきどほる　花谷　幸一

いきよう（異形）普通とちがつた形、あやしい形。
友搗きし異形の餅を腹中に　西東　三鬼

いきれ（熱）むしあついこと、ほてること。
蠅は地に九月のいきれ去りがたき　山口　壌通

いく（幾）不確實な量を表はす語、數へきれぬ程多い意をあらはす語。
出づることなかりし冬の幾月夜　山田あつし

いくさ（戰）戰爭。
裸で唱ふ子の列大人はいくさすな　中村草田男

いくばく（幾何・幾許）どれくらゐ、程なく。
餘命いくばく生命保險拂ひ込む　目野　草城
幾何の寒さに耐ゆる我身かな　高濱　虚子
毛糸編む老いくばくのときのこる　阿久津水門
汀までいくばくもなし寒の墓　佐野まもる

いくとせ（幾年）いくねん、なんねん。

いくとせの我鬼忌近づく壘かな　岩田　潔

いくり（礁）水中にかくれてゐる岩、隱れ岩。

春潮の颯きは礁みなうごく　西垣　脩

いこう（憩ふ）息をつぐ、やすむ。

冬濱に洋傘を突きさして憩ふ　内藤　吐夫

すぐ前に菜の花ゆれてゐる憩ひ　松森多磨於

六月や水と乙女の邊に憩ふ　坂東　菖雨

いさかい（諍）いひあひ、爭論。

いさかひのたねはまた子に鵙高音　齋藤　四郎

いさご（砂）すな（古語）。

清水掬むやいさごのひかり指に泌み　八木　繪馬

いささか（聊）わづか、かりそめ、ちよつと。

水巴忌やいささか打ちし蕎麥匂ふ　中島　月笠

朝酒にいさゝか醉ひぬ根深汁　村山　古郷

いさゝかの寢酒あたゝめ鬼城の忌　西山　誠

いざのう（誘ふ）さそふ、すすめる。

午後は微熱いざなふごとし黒揚羽　中村　里子

郭公や冷えをいざなふ峽の雨　潮　みつる

いさる（漁る）すなどる。

さむき夜の見えざる沖にひと漁る　宮津　昭彦

いざる（居行る・膝行る）坐りながら進む。

星屑の星の一つのいざりけり　吉村　清淨

いさよう（猶豫ふ・躊躇ふ）ためらふ。

秋の風母牛いざよふ秋日かな　犬塚　楚江

うすうすと月いさよへる花菜かな　坂本　嶺花

いしだたみ（石壘）平たい石を敷きつめたところ、甃、、いちまつ。

夕虹や水蜘蛛跳ぬる石だたみ　橋本　夜叉

いずこ（何處）どこ、どつち。

秋風やいづこへ行くも稻の中　永田　耕衣

鎌倉やいづこの寺も白つゝじ　山口　芳泉

いずち（何方・何地）いづれの方、どつち。

春雷やいづちをむくも麥は疎に　佐野　俊夫

ビアホール出でゝいづちへゆくべしや　中川　螢思

秋をゆくいづちも槇の離かな　松並てる子

いずれ（何れ・孰れ）なににしても、どのみち。

桐の木にいづれの鳩や啄木忌　園田夢蒼花

寒林のいづれの松もそびえたり　永松　伊魚

いそ（磯）湖・海などの水際。

剝がれ飛ぶ海苔を追ふ子に磯暮れぬ　滑川　勇水

いたいけ（幼氣）おさなく小さいさま、小さく愛すべきさま。

いたいけのはだしに泣くよ春風に　原　コウ子

いたく（甚・痛く）はなはだ、非常に。

推敲にいたくも更けぬつづれさせ　松本　秩陵

いだく（抱く・懐く）腕の中にかかへこむ、心中にもつ。

吾が流轉花火の股に抱かれて　細谷　源二

かい抱くセロに秋灯あつまれる　花谷　幸一

いたずき（勞）骨折、功勞、病氣。

いたつきの妻を守りて菊の雛　村岡　菓舟

いたづら（徒）むなしいこと、むだ。

秋風裡身のいたづらに晝寢かな　齋藤　空華

いただく（戴く・頂く）頭にのせる、高くあげる、貰ふの敬語、主として敬ひ仕へる、食ふ飲むの敬語。

秋風や妻といただく天碧く　佐野青陽人

北窓もまた炎天をいただけり　谷野　予志

凶作の月をいただく案山子かな　辻村石魚子

いたわる（勞る）あはれむ、ねぎらふ、大切にする。

きぶくれの妻をいたはる口重し　佐藤　鬼房

子よ虹よ妻いたはりし日とてなく　中山　直木

いち（位置）場所。

まくなぎの位置さだまらず雪の上　橋本多佳子

いちあく（一握）ひとにぎり。

一握のわが影はこぶ道炎えて　纐纈　泉城

一握の落穗に消ゆる夕日かな　德永　武雄

いちいち（一一）ひとつびとつ、みな。

豌豆の花のいちいちあからさま　飯田　蛇笏

いちず（一途）ひたすら、ひとすぢ。

嬰兒哭く聲のいちづに水溫む　岸　風三樓

妻の情一途に勁し霜柱　土岐錬太郎

蜻蛉追ふ子の瞳一途に澄みゆきぬ　五十嵐研三

わが家路雲は一途に夕燒けて　三輪　順彦

いちだ（一朶）ひとえだ。

雁來紅一朶の雲の燃えさかる　中尾　良也

梅雨嵐去りたる雲の朱一朶　佐々木母屋

いちばう（一望）見渡すかぎり。

一望の黃なる稻田をめぐる川　西谷三四郎

いちまつ（一沫）ひとなすり、ほんの少し。

秋冷や一沫のこる百日紅　瀧　春一

秋風や一沫の泥くるぶしに　石田　波郷

いつ（何時）どの時、ふだん。

春しぐれいつより僧と呼びそめし　中川　宋淵

いつか（一家）一軒、一家族、學藝の一派。

雜炊に風邪氣の一家揃ひけり　中村　桃岳

いつかい（一塊）ひとかたまり。

寒月下一塊の雪病むごとし　野澤　節子

一塊の冬日となりて蘆に落つ　木戸口金襖子

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook